



広報モニター 見てある記

感動!

わざ

おおむらの技名人

私たちが、広報モニターです！
今回第3回目の取材は、大村で活躍している技名人をテーマに記事を作成しました。



今回は大村で活躍している「人」にスポットを当て、ものづくりや手仕事の技を通して、持つ市内8地区8人の名人を、2回に分けてご紹介します。

今月は、4地区4人の人を取材しました。ものづくりや手仕事の技を通して、人とのつながりを大切にしながら、地域とともに歩んでいこうと、私たちに感動を与えてくれます。

私たちが大村市広報モニターは、市が行う広報活動全般についてモニターングし、市政だより、市のホームページなどが市民にとって見やすく、知りたい情報が掲載されているか調査・検証を行っています。広報モニターの活動の一つとして、「広報モニター見てある記」と題して、自ら取材、編集を行い掲載しています。

西大村

子どもに伝える布ぞうり

井上雅介さん(西大村本町)



作りを指導することになりました。

今から約60年前、第二次大戦中の戦況が悪化しつつあった時代、履き物が無くて、通学にも困ったため、小学4年生から作り方を習って作り始めたのが「わらぞうり」でした。最初は大人に手伝ってもらって仕上げの状態だったそうですが、中学校を卒業するまでの6年間にわたり作り続けられました。靴代わりに毎日履くものなので数日しかもたず、常に4〜5足は予備に作って備えていたそうです。

時は流れて物資も出回ってくる、いつしかわらぞうりの必要性はなくなり、時代とともに忘れ去られていきました。それが今、昔のものづくりで子どもたちに指導するなんて考えてもいなかった井上さん。地域の子どものために役に立っていると思うと、昔の苦労が報われる、そんな想いだそうです。



竹松

手作り竹細工に魅せられて

吉崎英智さん(富の原二丁目)



子どものころ、身近にあった竹トンボ、水鉄砲などの懐かしい竹細工の数々。竹トンボに、右きき用と左きき用があるなんて初耳でした。材料の竹を自分で削り、それを使って遊ぶ喜び。吉崎さんが、これまで長く活動を続けてこられた原動力は、きっと子どもたちの喜々とした笑顔だったのではないのでしょうか。

40年前、市民会館広場で開かれた「5月まつり」に、働く仲間たちが集まって指導したのが活動の発端でした。それから、子どもたちに竹トンボ作りを教えたり、やがて、大人も集まって、廃油を使った石けん作りなどのエコ活動にも発展していきました。

子ども科学館で、月に1回土曜の午後に子どもたちに竹細工を教える活動になります。健全協の行事や市内のイベントでも活動しています。「子どもたちが望めばもっと教えたいが、今の子どもたちは忙し過ぎるようだ」と話される顔が残念そうでした。携帯電話やパソコンをいとも簡単に使いこなす現代っ子たちに、「肥後の守」を使つてももの作り出すおもしろさを体験させたいと、笑顔で語ってくださいました。



松原
あふれる想い、魂の人形

● 米原 佐代子さん(松原 丁目)



一度目にするると誰もが惹きつけられてしまう人形。人形全体から魂が感じられます。単なる手先の器用さや芸術性だけでなく、作者の知識・人間性という土台があつて生まれる人形ゆえに、見る人の心をとらえて離しません。

これ30年。偶然目にした創作人形の個展で感動し、教室に通うように。決められた材料や手本があるのではなく、自分の発想で身近な物で作ることができですが、その時々で同じ作品は出来ないということが大きな魅力です。

一体の人形を仕上げるのに2〜3か月かかります。新たな材料を試してみたり、身の回りで新たな素材を発見したりと、自身の生活・生きざまが人形作りに密接に関わっています。

「人形作りは、自分の人生そのもの。人形を取ってしまうと自分ではなくなってしまう」とおっしゃいます。人形作りを糧に、自分なりの人間性・芸術性を持ち、決して気取らずいい年を重ねていくことが目標だそうです。

創作人形教室へ遠方からも多くの生徒さんが通っています。「創作人形をもっと多くの人に知ってもらい、人形を通して大村の文化の発展に貢献していきたい」と語ってくださいました。



福重
自然に見入ってしまう貼り絵

● 三厨 住江さん(沖田町)



「あれは何だろう?」「どうして出来ているのだろうか?」と思ってしまう手の込んだ、魅力ある技の作品、貼り絵(布絵)、蹴鞠。

最初、距離をおいて見ても自然に体が近づいて、ゆっくりと見入ってしまう。作品ごとに豪華にも見える一方、素朴感もあり、現代人が忘れていた日本の情景がそこにあるようです。

始められたきっかけは、20年ほど前、中地区公民館の和裁教室にグループ8人で学ばれたことからでした。当初、月4回ペースでしたが、最近は月2回

の教室で継続しておられます。貼り絵の魅力について尋ねると、「布を貼り合わせて段々と色鮮やかに形ができていくのが楽しい」とのことでした。

作品は、毎年秋に開催される大村市老人展や沖田町老人会バザーなどへ出展し、老人会へ寄付もされています。また、バザーでの収入はグループの活動資金にも使われるそうです。

今後は「機会があれば作品展や地域の文化祭などにも出展し、多くの人に見てもらえれば」と語ってくださいました。



取材を終えて・・・

◆皆さんの作品や活動スタイルは違いますが、共通するものが多いと感じました。それは、①人そのものが素晴らしく情熱的だったこと。特に、技を習いに来る人たちに熱心に教えておられること。②後継者(子どもたちを含めて)や技の伝承を希望されていること。③作品発表の機会を要望しておられること。④市内外でご活躍され貢献されていることなどです。作品自体も素晴らしいのですが、同時に人柄や意気込みも感動を覚えました。

派手目のものばかりが取り上げられる現代風潮の中で、じっくり、ゆっくりと見入る作品は心豊かに身にしみるものでした。この紙面を通して多くの市民の人にも知って頂ければと思います。

広報モニターの活動はボランティアで行って頂いています。3回目となる今月号の編集も、取材や記事の編集など大変ご苦労さまでした。次回の掲載は3月号の予定です。